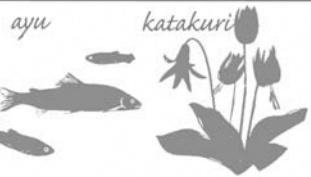




魚沼市 まちづくり委員会だより



地域産業振興部会

魚沼市内では、近年おいしいパン屋さんの新規開店が相次ぎ、市民からも注目されていました。そこで、魚沼をイメージするおいしい「ご当地パン」を一同に集め、試食と販売のPRイベントを開催しました。

第1回目は、小出ボランティアセンターに予想もしていなかった長蛇の列ができ、パンの人気に驚くばかりでした。暑い中お並びいただいたのに売り切れ続出となり、大変申し訳ありませんでした。

また、ご当地パンの投票を行ったところ、ロリアンのメロンパンが第1位となりました。

第2回目は、地元商店街との連携による相乗効果と空き店舗対策を願い、小出本町商店街アーケード内にて「うおぬまパンストリート」というイベントを開催しました。当日は、日頃見る事のできない行列ができ大好評でした。

ご参加の皆さん、ご協力いただいたパン屋さん、高校生ボランティアの皆さん、ありがとうございました。



7/12(日)

小出
ボランティア
センター

集客: およそ
750人



パンのおいしい香りが漂いました



想定外の大行列



10/18(日)

小出本町
アーケード内

集客: およそ
700人



おいしいパンを前に皆さん良い笑顔でした



小出本町に謎の行列が出現



高校生ボランティアの皆さんも頑張ってくれました



お店の看板娘になりきってくださいました

イベント協力店(順不同)

Peek-a-Booほりのうちのパン屋さん・パン工房魚野川 うさぎばたけのパン屋さん・ロリアン
むしやすめ工房 桟歩道・Boulangerie Chou*Chou・手作りパン工房 けやきの木



福祉健康部会

布施院長に お話を聞きしました

2015年6月に魚沼には大きな医療の再編成がありました。これは魚沼二次医療圏(魚沼市・南魚沼市・十日町市・湯沢町・津南町)の今後50年の社会保障基盤を創るための大きな改革です。



Q. 新しい小出病院の役割は?

A. 今回の再編成の柱は二つあります。ひとつは、魚沼のなかで高度・専門的な医療拠点を創ること。これが魚沼基幹病院です。もうひとつは、生活圏に身近な医療拠点を確保することです。ふだんの健康管理や急な体調変化に対応できるように、小出病院は外来だけでなく救急や入院機能を整備しています。また在宅医療も小出病院の役割です。頻度の高い医療を、標準的に提供すること(これをプライマリケアといいます)が新しい小出病院の役割です。

Q. マイ米ネットとは何ですか?

A. 「地域はひとつで大きな病院」が地域医療再生の合言葉です。魚沼のどこで医療を受けてもその情報がひとつのカードで共有できる、魚沼全体の共通IDカードです。医療連携システムの要ですので、ぜひ最寄りの行政窓口か医療施設でお申し込みください。もちろん無料です。

Q. 地域医療魚沼学校はどんなことをしていますか?

A. 「市民こそ医療や福祉を育てる大事な資源である」を合言葉に、市民一人ひとりが自分と家族の健康を守る主体であることを自覚して、そのための行動できることを目指しています。定期的な勉強会活動や出張講義などをしていますので、ぜひご参加ください。HP(<http://www.uonuma-school.jp/>)や市報で情報を発信しています。

Q. 医療から見たまちづくりは?

A. われわれ医療福祉の人間が考えるまちづくりは、「地域包括ケアが実現できるまち」です。ぜひ新しい魚沼市のまちづくりに、病院は医療福祉を専門的に考える立場で参加させていただければと思っています。

空き家問題について話し合っています。 「ご参加ください」

福祉健康部会では、魚沼市内の空き家問題について話し合いがもたれています。魚沼地域では市民の高齢化や人口減少に伴い、空き家や耕作放棄地が増えています。小出中心街でも空き家が目立つようになっている一方、小出地区ではアパート需要があります。多くの市民の参加を望んでいます。詳しくはまちづくり委員会までお尋ねください。

教育文化部会

『小出地区学校支援本部』の発足

「今の学校の先生は忙しい」「子どもを学校に通わせている子育て中の親も同じように忙しい」「子どもたちはゲームに熱中…」「スマホの使い方が心配…」など、5年前のまちづくり委員会教育文化部会での声である。

社会が複雑化、意識の多様化する中で子どもたちを取り巻く環境も大きく変化している。同時に学校や先生に対しても過剰と思われる役割を求められ、そこだけでは担いきれない状況もある。子どもが学校を卒業すると親の意識は学校の事から遠くなり薄れてゆくのが実態である。日頃、学校や教育行政の事や地域で見かける子どもたちの姿などが話題になってしまっても、問題解決の為に具体的に動く事が少ないようと思われた。このような状況の中で、解決方法のひとつとして、学校に多くの事をまかせるのではなく、学校と地域が連携し、協力する必要

魚沼市立小出病院

生活自然環境部会

第2回 魚沼花じまんコンテスト 金賞に輝いた

橋 忠一さん インタビュー!

今回の金賞は個人の部で応募された山口在住の橋さんです。みどりな木です。



| 金賞おめでとうございます。
授賞の感想をお聞かせください。

選んでもらって、たいへん嬉しい思っています。
入賞したらいいなと思って応募しましたが、金賞をもらつてびっくりしました。

| 橋さん
選んでもらって、たいへん嬉しい思っています。
入賞したらいいなと思って応募しましたが、金賞をもらつてびっくりしました。

— 金賞おめでとうございます。
授賞の感想をお聞かせください。

はい、育てはじめで60年近くになります。もともと家にあった小さな藤を育ててきました。他の花も好きなので色々植えます。

— 管理がたいへんそうに見えます。ですが、どうなさっているのですか?

— ご苦労する点は? 橋さん
やはり、棚をかけたり、はしごしたりです。でも、続けていけます。限り、あの木を維持管理したいと思っています。



今日は市内五ヶ所で参加写真を展示して皆さんに見ていただきました。



| 最後に一番うれしい時は?

橋さんが藤の木を我が子のように大切に育てているんだなあと感じました。ご参加ご協力ありがとうございました。

藤の花がきれいにたくさん咲いた時は、うれしく幸せに思います。

◆授賞者のみなさま◆

銀賞 四番町三町内会
郡山由紀子様

銅賞 須原コミュニティ協議会 本田幸恵様
堀之内中学校 佐藤春代様

他の参加団体をご紹介します。

●伊米ヶ崎公民館 ●広神東小学校 ●佐梨保育園 ●上条コミュニティ協議会
●大谷地老人クラブ ●コミュニティ協議会権現堂 ●銀山平森林公园等管理組合 ●四日町花クラブ
●上ノ原商店街組合 (敬称略)



稚魚の放流

性があげられた。

「出来るひとが、出来ることを、出来るときにやる」を合言葉に、行政、学校、地域に働きかけ、情報交換をする中でようやく昨年5月に「小出地区学校支援本部」が組織化され、事業を行なう事となった。以来、学校と地域、諸団体と連携し、学校の生活科・総合学習への支援、学校周辺整備などをPTA活動とは違った視点で活動を進め、その成果をあげている。

今後はすでに学校支援本部として活動を進めている、堀之内、広神、守門の各地区や、同様の活動を行っている入広瀬、湯之谷各地区とも連携を密にしたい。

まちづくり委員会の構成員は全て市民であるので、次代と魚沼市を背負う子どもたちの為に、更にご理解とご参画をいただき、質の高い、充実した事業を実行したい。

魚沼市まちづくり市民会議

●平成27年12月16日(日)13:00~16:30
●小出ボランティアセンター
多目的室にて

～新たな未来に向かって まち・ひと・しごと 魚沼創生～

平井会長の挨拶に始まり、市民憲章唱和、第二回花自慢コンテスト表彰式が行われた。

第一部は、平山征夫氏(新潟国際情報大学学長)から、「真の地方創生を魚沼から」と～3つの『ア』を目指し」と題し、ご講演いただいた。

平山氏は、魚沼市ものづくり協議会の顧問も務められ魚沼市とも関係が深く、まず市民憲章の一節、「ささえあい助け合う 楽しいまちに」を取り上げ、まさに「奪いあえば足りない社会 分かち合えば余る社会」と話された。

今的地方創生が呼ばれる背景と国による政策や平山氏の考える地域創生、国の対策に振りまわされず、自分の地域が本当に自立できるように政策を実施するべきで、この地域、魚沼産という強いブランド力の強みを活かした再生政策の展開。子どもがまず地域を大好きになる政策が必要だとお話し下さいました。

第2部は、パネルディスカッション。

コーディネーターを川村健一氏(広島経済大学教授、まちづくり委員会アドバイザー)、コメンテーターを平山征夫氏に、3名のパネラーから

「魚沼創生の課題とその戦略について」のテーマで、農業・食・観光の立場からそれをお話し下さいました。パネラーは、佐藤貞さん(㈱入広瀬代表取締役)、井上円花さん(魚沼市地域おこし協力隊)、三友一郎さん(友家ホテル取締役支配人)。

まず、農業のことで佐藤さんから。平成19年に農業法人を設立。5年前は2haだったが今は22haの稻作を行っており、離農者が多く農業者への集積が進んでいる。農業は世襲で継続できたが、今限界にきていく。

うっかりすると、近所の家が取り壊されていく。地域の児童も激減し、父世代の同級生は100人だったのが、息子世代はこのままだと5人。この人口減によっても農業就労者が減っている。人手の確保は難しく、研修生制度など活用しているが通年雇用は難しい状況。

平成24年に研修生の受け入れを始めたが、将来的には年間100人位受け入れ、それに伴い、住居先となる空き家の活用なども進めていきたい。

食のことで井上さんから。田舎に憧れこの地域にきたが、経験等も含め自分を活かしたこと何かしていきたい。現在大白川に住み、地域活性化に取り組んでいる。

「魚沼食べる通信」を平成27年11月に創刊した(平成28年2月2号発行)。これは一言でいうと「食材付き情報誌」で、いろいろな情報に分断されず、生産者と消費者を直接つなぐもの。この食をはじめ、魚沼のアイデンティティはたくさんあり、もっと胸を張っていくべきもの。

観光のことで三友さんから。今年、宿で独自の「お土産」的なものをつくりました。置いただけで買ってもらえた。望まれたものを望まれたように置けば売れる。「地産地消」でなく「地産外消」が宿では実現可能。魚沼はお米の評価も非常に高く、「魚沼産コシヒカリ」という直球があり、ナス・茶豆などの評価も高く、もっともっと外に出すと良い。観光資源も磨かないとダイヤモンドにならないのに、磨くことを忘れている。

まず、この地域のマイナス志向を解消していくことが大事で、これは根本的なもの。

パネラーの話す「魚沼の現状と想い」に、会場はうなづく人、じっと聞き入る人など様々だったが、熱心に受け止め、手応えが感じられた。

編集後記

「生物多様性」の講座を聴く機会があった。日本は豊かな生物多様性にあふれた国だが、一方で非常に危機的な状況にあるホットスポットに日本全土が指定されているとのこと。この「生物多様性」、動植物だけの事がと思いきや、もっと世の中全般、食文化から伝統芸能に至るまで波及することなのだと聞いた。もある一つの植物がこの世の中から消えたら、それと同時にその料理や食文化が、ひいては伝統行事までも消えてしまう可能性があるというのだ。確かに、もし、春の七草の一種でも消えたら、それにまつわる習慣も行事も危うくなる。代替えはできても、そこでもう内容は変わってしまう。

そう考えると、周りにあるいつも何気なく見ている雑草さえも貴重なものに思えてくる。もしこの草が消えたら、それは文化を変えるかもしれないなんて・・・。